

# 平泉の発掘庭園

—発掘調査成果の整理を通じて—

三 浦 謙 一<sup>※</sup>

## はじめに

奈良国立文化財研究所<sup>1)</sup>は1998年に『発掘庭園資料』を刊行した。古墳時代の祭祀遺跡の一部を含め飛鳥時代から明治時代までの全国の発掘庭園273件をほぼ網羅したもので、日本庭園史における基礎資料となっている。同書には、「発掘調査によって発見された庭園遺構を『発掘庭園』と呼んでいる」とある。発掘庭園はその後増加しており、独立行政法人奈良文化財研究所はホームページ上に発掘庭園データベースを公開し、『発掘庭園資料』刊行後に発見された発掘庭園等を追加掲載している。

岩手県西磐井郡平泉町は12世紀に奥羽に権勢を誇った平泉藤原氏が拠点とした都市平泉の遺跡が現在の市街地と重なりながら数多く残されている。発掘庭園データベースに登録された平泉町所在の発掘庭園は10件で、それらには03001～03010のコード番号が付されている。志羅山遺跡庭園遺構(コード番号：03008)が12世紀よりも下がる以外は平泉藤原氏の時代、12世紀に属する。

平泉町における庭園調査の歴史は古い。1952年、文化財保護委員会によって無量光院跡が発掘調査され、『吾妻鏡』の記述のように宇治平等院を模していることが確認された。1954年からは、藤島亥治郎氏を中心とする平泉遺跡調査会は観自在王院跡と毛越寺の学術発掘調査を5か年にわたって行い、浄土庭園の実体に迫る成果をあげた。1972年度からは整備を目的にした発掘調査が観自在王院跡で実施され、舞鶴が池と呼ぶ園池を中心とした史跡公園として整備・活用されている。同様に、毛越寺庭園においても復元整備等を目的に1980年度から10か年をかけて発掘調査され、大泉が池の全面石敷の洲浜や中島の調査、背後の山から引かれた遣水の発見などの大きな成果をあげ、いま私たちの眼前に12世紀に構想された浄土世界を見せてくれる。

観自在王院跡と毛越寺の発掘調査に引き続いて、平泉遺跡調査会は1959年から10か年にわたって中尊寺境内の発掘調査を行い、境内の伝三重池跡と伝大池跡もその対象となった。大池はいわゆる『中尊寺建立供養願文』の記述に深く係わる重要な遺構であり、平泉町教育委員会は1997年度から7年間、また2007年度から現在まで内容確認発掘調査を継続している。さらに、無量光院跡は2002年度から内容確認を目的にした発掘調査が開始され、現在も継続されている。北小島やそれと本堂が建っていた西島を繋ぐ橋跡、導水溝が検出されるなど、多くの貴重な新知見が得られている。また、1980年代末には平泉藤原氏の政庁と目される柳之御所遺跡の中心域から園池が発見され、以降、町

---

※岩手大学平泉文化研究センター

1) 現在は独立行政法人奈良文化財研究所。

内の緊急発掘調査の増加に伴い平泉藤原氏の時代の園池の検出が相次ぎ、新たな資料が蓄積されてきている。

無量光院跡と観自在王院跡、毛越寺、中尊寺、それに金鷄山を加えた5カ所の資産は、2011年、「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として世界遺産に登録された。岩手大学平泉文化研究センターは平泉の発掘庭園を研究テーマの一つとしている。本稿は、平泉の発掘庭園の発掘調査履歴を一覧で示すとともに園池に係る発掘調査成果の概略を紹介するものである。

## 平泉の発掘庭園

### 1 毛越寺庭園（もうつうじていえん）

所在地：平泉町平泉字大沢／奈文研コード番号：03001／発掘調査歴：表1～13／図：2

特記事項：国特別名勝。毛越寺は毛越寺境内附鎮守社跡として国特別史跡。

平泉遺跡調査会による学術発掘調査が1955年度から58年度にかけて実施された。金堂円隆寺や嘉勝寺、講堂、常行堂、法華堂等の伽藍、南大門、大泉が池と呼ぶ園池等、寺域全体を対象にしたトレンチ主体の調査であった。その後、平泉教育委員会によって保存修復及び復元整備を目的にした発掘調査が1980年度から10か年10次にわたって行われた。北東岸から北岸、西岸にかけての岸部分の調査、中島の全面調査、東門とそこから円隆寺へ向かう園路の発見、北小島の確認等の大きな成果をあげたが、中でも遣水を追跡し、ほぼその全容を明らかにしたことは貴重である。

寺域は、南側と東側、北東部の弁天池との境は土塁やその痕跡とみられる高まりによって区画されるが、北西側は塔山の山麓が迫り、西側は沢状の地形が入り込む。東西約360m、南北約180mの長方形を呈し、中央には南大門が礎石を残す。

南大門の北には大泉が池とよぶ園池が中島を浮かべ、中島へは1×11間の南橋、中島から金堂円隆寺の建つ北岸へは1×7間の北橋が架かり、現在も橋脚の一部を池中に残している。大泉が池は東西約190m、南北最大約90mの曲池である。北東部は丸みをもって大きく膨らみ、南東隅は洲浜が張り出し、南東は出島と立石を伴う島、また南西隅には築山と勇壮な荒磯石組が築かれている。護岸はほぼ全面が玉石敷である。以下、主に1980年度からの調査成果に基づいて述べていく。

園池は新旧2時期があり、新期は北岸の一部が改修され、中島も大幅に改変されている。また築山の下には洲浜の石敷面が続き古期の排水溝が存在することから、平泉遺跡調査会の報告書でも指摘されていたように、築山の一部は新期に伴うことが再確認された。

中島は園池中央部からやや北西に位置する。第13次調査でほぼ全容が明らかになった。新旧2時期があり、古期は地山を掘り残して造られ、西北西から東南東に細長く東側が半島状にやや突き出す楕円形状を示し、基底部分で35×21mを測る。平坦面、護岸とも玉石敷で、一部は池底まで連続する。新期は古期のものの東側を削って整形し、基底部分で東西11.5m、南北8.5mほど東北東へ長く拡張するが、それは礫層と粘土層の互層によるもので、頂部は平坦ではなく尾根状になる。表面への玉石敷面は検出されていない。全体の形は勾玉状を呈する。

第5次調査の際、遣水の石組の落ち口が円隆寺の鐘樓付近の池岸に発見された。約20個で構成された石組は平坦な粘板岩を階段状に2段に据えてその間に玉石を敷き、両側には大小の粘板岩を巧みに配置している。その後、円隆寺の東廊に沿って南流していることが判明したことから、第6次・第9次調査で塔山南西裾部の水源近くまで追跡した結果、水源と考えられる独鈷水からの溝跡やそれを貯める素掘りの池跡が調査区北端に見つかった。池跡は、平面が不整五角形で、池底で11×15mの

規模をもち、深さは0.2～0.5m前後を測る。池跡の南東部が遣水の起点になり、素掘りの溝で南東へ流れたあと、平坦部への変換点上部に滝石組を構成する粘板岩を主とする多数の石が見られたが、崩壊や抜き取りによって原形をあまりよくとどめていない。その部分の上幅は3m前後である。滝石組の水が落ちる部分から遣水は平坦部へ移行するが、落ち口直下の部分は上幅6mともっとも広く膨み、5.5×2m前後の三角形の島が築かれ中洲の様相を示している。そこからは緩やかに蛇行して南流するが、途中には数個の石を立てて島を造るとともに石により流れが3分される個所がある。さらに南方には東門から円隆寺東廊に向かう園路と交差し、架橋される。この部分での遣水の幅は約1.5mで、橋桁を受ける材が両側にわずかに残っていたことから木橋だったことが分かる。橋跡下には玉石が敷かれていない特徴がある。橋跡からは屈曲しながら東へ約23m流れて石組の落ち口に達する。遣水の勾配の平均は1000分の55となる。落ち口から中島が築かれた平坦面の変換点まで直線距離にして67m、その上部から貯水の池跡に注ぐ溝の端までが45m、計112mにわたって導水に係る遺構が調査された貴重な例になる。

玉石敷が良好に残る北西岸付近には入江状遺構が検出され、そのすぐ南には西からの導水溝と推測される溝も見つかっている。また、主な排水溝3条が南西隅に検出された。新旧関係があり、古期の2号溝と3号溝は合流するが、3号溝は築山の構築土が底部から堆積し、築山構築以前に存在していたことが明らかになった。新期の1号溝は上幅2.7m、下幅1.8m、深さ1.1mを測り、2号溝と3号溝を切りながら南西方向へ24m追跡され、さらに調査区域外へ延びている。

嘉勝寺は円隆寺の西に隣接して存在する。平泉調査会による調査では、翼廊の南北部分は複廊で、西廊は南北16間、東廊は南北12間が検出されたが、両廊とも南端の様相がはっきりしなかった。第11次調査は東廊の南端を発掘し、中央列の柱穴3個2間分を検出して計14間まで確認したが、それ以南に柱穴は検出されなかった。柱穴はいずれも石敷を掘り込んでいる。一方、円隆寺翼廊は石敷面を掘り込むあるいはその上に礎石を置くところはなかったことから、両寺の造営には時間差があり、円隆寺が先行するものと考えられた。

第7次調査では円隆寺の前庭の玉石敷面で大規模な柱穴5個が一列に並んで検出された。中島から渡された北橋の橋脚と挟間石の中軸線を北へ5m延ばした位置に1個があってその東西に2個ずつがやや不規則に並び、すべてに直径0.4～0.5mで円柱または八角柱の柱根が残る。5個のうち3個は控柱を伴い、幡遺構とされている。またそのすぐ北には径0.16m前後の柱根が一部に残る小柱穴9個が東西に一列に並んで検出された。幡遺構と一連のものであろう。

『吾妻鏡』文治5年9月17日条は、毛越寺は平泉藤原氏2代基衡が造営したが、嘉勝寺が完成する前に死去したため3代秀衡が引き継いで完成させたとする。基衡による造営は12世紀中葉である。平泉遺跡調査会の調査では、円隆寺東翼廊に火災の痕跡がみられ、その後に再建されたことが指摘されていた。そのことと嘉勝寺の造営、園池の改修がどのように関連し、いつ行われたのかが課題として残る。

## 2 観自在王院庭園（かんじざいおういんていえん）

所在地：平泉町平泉字志羅山／奈文研コード番号：03002／発掘調査歴：表14～21／図：2

特記事項：国特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡に含まれる。

発掘調査以前はほぼ寺域全体が水田化されていた。発掘調査は2期にわたり、平泉遺跡調査会による学術発掘調査は1954年度から56年度まで行われ、平泉町教育委員会による整備復元を目的とした発掘調査は1972年度から77年度にかけて5次にわたって行われた。それらの成果を基に整備復元され、現在は史跡公園として活用されている。

西隣にある毛越寺とは土塁の間の東西幅約30mの道によって隔てられている。寺院の正確な四至は不明であるが、西側は土塁や側溝、西門、車宿などの遺構によっておおよそが分かり、また東側は南北に走る町道付近にあったことが推測できるが、南北二辺については発掘調査でも明確にはない。ただ、園池跡南岸の中央から南へ約80mの位置に南門と貝形柱が検出されたことから、南門につく土塁あるいは築地が後世に完全に削平された可能性が指摘されている。南門を南限とみた場合、南北約240m、東西約120mの規模が推測される。一方、『観自在王院跡整備報告書』は園池跡南岸の土手を土塁の痕跡とみて伽藍全体の南限と推測し、南北を約150mとしている。そしてそこから南門までの敷地は『吾妻鏡』文治5年(1189)9月17日条の「一 高屋の事」に述べられた高屋に相当する倉庫群があったのではないかと推測している。

寺域の北端に阿弥陀堂跡があり、南面する園池はその形から舞鶴が池と呼ばれる。北岸は大きな入江状あるいは出島状、岬状につくられ、東西南北約90mの規模を持ち、深さは0.5mである。護岸の石敷の一部が1954年度からの調査で北東部に確認されていたが、1974年度の東岸から北東岸を中心にした調査でも石組を伴っている部分が検出された。しかし南岸の土手状の高まりの部分は地山で構成され、石敷は検出されなかった。

北岸の岬状部分や北東岸、南西岸などには池汀石組が残存し、西岸中央は滝頭石組とそれに連なる荒磯石組が出島を造る。滝頭石組の北西部と北東岸に接する部分に築山と推定されるものの一部が残り、北東岸のそれには伴う石組の一部が検出された。滝頭石組が10種に分類された『作庭記』の滝の一つである「伝落」に相当することは良く知られている。

滝頭石組と荒磯石組に通ずる遣水の溝が検出された。溝は素掘りの状態であったが、当初は玉石を内に貼って仕上げていたものとみられる。水源は毛越寺境内の北東部に現存する弁天池と推測され、北西から南東へ流れるが、西側土塁で隔てられる部分には木樋による暗渠が作られ、土塁の東側溝と合流して南へ流れた先で南東へ分かれて流れて滝頭石組に達する。

中島は池中央より南東にあり、伝普賢堂が建つ出島状の部分に面している。東西約3.3m、南北約1.2mで、本来は楕円に近い形状だったものが、西半の南側部分が削平されて幅が狭まっているとみられ、東西に細長い形になる。中島北岸に接続して発見された石敷は池底のものがあると考えられた。大型の石があり景石とも推測されたが、後世の改変があってはっきりしない。中島から北岸や南岸、東岸へ架けられた橋跡も想定して調査されたが、明確な遺構は検出されなかった。

園池の北に大阿弥陀堂と小阿弥陀堂と伝承された阿弥陀堂跡が東西に並ぶ。礎石あるいは根石の残存状態は良くないが、おおよその規模は推定された。また、その間には、礎石建物跡や掘立柱建物跡、石敷の方池跡など、時間差をもつ3種の遺構が検出され、伝大阿弥陀堂跡と伝小阿弥陀堂跡に先行するなんらかの施設があったことが考えられた。方池跡は、約5.4m×4.4mの方形の浅い落込みの底の全面に玉石を敷き詰め、各辺や四隅に見つかった小さな柱穴などから、杭を立てた板組の上部施設を伴っていたことが推定された。また、排水溝とみられる溝を南西隅に伴う。しかし、これらの遺構の詳細と性格は不明とせざるをえない。

園池の東には伝鐘楼跡と伝普賢堂跡があって礎石が残るが、伝普賢堂跡は園池の東端を埋立整地した後に建てられていて、当初の園池とは時間差があることが推測された。

観自在王院は『吾妻鏡』文治5年9月17日条に平泉藤原氏2代基衡の妻室が造営したものと記述される。妻室については、後世のものであるが仁平2年(1152)の年号が刻まれた墓碑が建っている。毛越寺同様12世紀中葉の造営である。



### 3 中尊寺境内三重池庭園遺構（ちゅうそんじけいだいさんじゅういけていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字衣関／奈文研コード番号：03003／発掘調査歴：別表22～24／図：3  
特記事項：中尊寺境内は国特別史跡。

中尊寺境内の表参道月見坂を上りきると金色堂前の広場に出る。そこに直径30mほどの不整形形の弁天池があり、大きな中島には弁財天堂が建つ。その地点には三重池があったと伝えられる。

伝三重池跡の発掘調査は、岩手大学により1957年度に行われた大金堂前第1次調査、平泉遺跡調査会による1960～66年度の調査、岩手県教育委員会の1976年度の閼伽堂跡地区の調査と3回にわたって行われ、伝三重池跡は、北半は弁天池とほぼ重なり、南半は完全に地下に埋没していることが明らかになった。

大金堂前第1次調査は防火水道敷設工事が伝金堂跡の一部にかかることから行われたもので、池跡の南汀線と弁天池南西部に東西に架けられた橋跡が検出され、後に平泉遺跡調査会により再調査された。

伝三重池は、寛永18年（1641）の「中尊寺一山絵図」に上、中、下3段の池が連続して全体として一つの園池を形成するように描かれている。平泉遺跡調査会による調査では、3段と推定した上段のほぼ全体を検出するとともに、中段の一部を調査し、護岸の特徴や中島を明らかにし、先述の橋跡以外に2条の橋跡を検出した。なお、閼伽堂跡地区の伝三重池跡に係わる調査は上段の南岸の再検出と池跡埋土の一部の発掘である。

上段の池跡は北西から南東に細長い曲池で、汀線には細かな凹凸を多くして変化を持たせているが、明確な岬や入江は認められない。最大長約57m、最大幅約23mを測る。護岸は人頭大の石を高いところで7～8段に積み、勾配は非常に急である。池跡は西岸の北端が鋭角で屈曲し、その部分の北側は0.9m低く、中段の池跡の南岸を構成する玉石積護岸が認められた。両者の間には堤塘が築かれている。また上段の東端でも北側に中段の一部を確認しているが、その北側は弁天池と重なるために追跡できていない。上段、中段とも池底は素掘りで、景石などは認められない。

上段の池跡は中島を伴う。中央部から南東に寄った位置にあり、長径7m、短径5m、面積約9㎡の規模である。岸は5カ所の岬ならびに入江をもつ複雑な曲線で縁どられ、池の護岸と同様に池底から3～4段の玉石を急勾配で積んでいる。上面は平坦で、若干の玉石が散らばる。

大金堂前第1次調査で検出された西の橋跡は再調査され、また、それと向かい合う位置にも東西をつなぐ東の橋跡があり、それらと直交するように南岸と北岸をつなぐ南の橋跡も検出され、計3条があることになる。南の橋跡が1×7間と推定できるものの、他は構造や規模がよく分からない。それらの時期について、調査報告書は12世紀のものとして想定しているが、藤島亥治郎氏は中世以降のものとしてみている<sup>2)</sup>。

弁天池の北端からすぐは小舞沢と呼ばれる急峻な谷地形となる。想定される下段の池跡を追跡するために弁天池北岸と小舞沢の間をトレンチにより調査したが、池跡の痕跡は確認できなかった。別なトレンチでの調査結果と併せてみると、弁天池の岸から北西へ広がっているらしいことが推測できたが、上段、中段でみられたような石積護岸は確認できなかった。

遺物はかわらけが大量に出土している。ロクロ成形の小型のものが最も多く、12世紀前半代の年代観が与えられる。金色堂が造営された12世紀第一四半期には三重池もあわせて造られたものと推測されるが、西に隣接する伝金堂跡との関係も含め周辺伽藍との関係は明らかでない。特殊な構造が

2) 藤島亥治郎編著：『平泉建築文化研究』。吉川弘文館、1995年。

推測される池跡は浄土庭園とは違った思想に基づいて造られたものであろう。

#### 4 中尊寺境内大池庭園遺構（ちゅうそんじけいだいおおいけていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字衣関／奈文研コード番号：03004／発掘調査歴：表25～38／図：4

特記事項：中尊寺境内は国特別史跡。

標高94mの山中に建つ金色堂から南東100mの地点は関山山中で最も開けた平坦地で、東から南は桜川が刻んだ谷に限られている。そこに造られた大池跡は水田となり、杉の木が立つ中島が中央に小高く残る。金色堂との比高は24mほどである。

平泉遺跡調査会による1963、64年度の学術発掘調査の後、平泉町教育委員会により1997年度から10か年に及ぶ第1期の内容確認調査が行われ、2007年度からは第2期の内容確認調査が継続されている。

平泉遺跡調査会は、大池跡の西岸から中島を挟んで東岸へ至るトレンチによる調査、また中島の西側から北側にかけての範囲とそれに接続する池底を調査した。限られた範囲であり、大池跡の形態や規模は明らかにされなかったが、中島は概略が把握された。

池岸や池底は素掘りの状態で、護岸等の施設は認められない。中島は平坦な池底に土を盛り上げて造られ、径約18m×27m、面積約350㎡の南北に長い楕円形を呈している。池岸同様、護岸のための意匠、技法は見られない。景石とみられる12個のやや大型の垂角礫がまとまって西岸北部に検出されたが、石組としての明確な構成はとらないと同時にすべてが原位置を保つかどうかも疑問とされた。さらに中島と岸とを結ぶ橋跡を追跡したが、限られた調査区内には発見できなかった。

以上の成果を踏まえて行われた第1期内容確認調査は、大きくは、大池跡の護岸と池中、導水に係る遺構、平場、周辺部の4地点について行われた。

第55次は推定された北東池汀線外方の北東部緩斜面を調査した。それにより、大池跡は推定よりも大きく北東部へ広がっていたが、12世紀第3四半期には盛土整地され規模を縮小したことが確認された。またトレンチの一部に15～20cmの玉石が集中し、粗い護岸の石敷の一部と推定された。

現在も残る堤塘状の高まりが伝大池跡の東岸になることが予測され、第59、64次調査は東岸の状況把握を目的とした。その結果、改修されて新旧2時期があり、古期Ⅰ期が埋没した後に東岸に粘土を貼って築き直して新期Ⅱ期の池を造っていることが明らかになった。堤塘は基底部幅10.5m以上、高さ約2.4mと大型のものである。Ⅰ期には径10～20cmの石がまばらにみられ、護岸のための意図的な貼り付けと考えられたが、Ⅱ期には認められない。Ⅰ期の池底は掘りっぱなしであり、Ⅱ期はⅠ期の堆積土の上に池底が形成されて浅くなるが、粘土等は貼られていない。第67、69次調査は北西岸の状況把握を目的とした。その結果、後述の第54次調査で検出された溜池状施設と繋がると推測される導水路と大池跡への合流部が見つかった。導水路は16世紀後半～末頃の大溝に壊され、ごく一部が確認できたにすぎない。上幅1.5m以上、下幅約0.8m、深さ約0.9mと規模は大きく、西北西から東南東へ向かう。Ⅱ期に伴うものである。

第54次調査は大池跡の北西部、金色堂の南の急斜面に建つ弁財天堂の前面の斜面で行われ、溜池状施設の南岸と西岸の一部が検出された。南北8.5m以上、東西6.5m以上の規模をもち、深さは1～1.2m前後であるが、トレンチ調査のため形状は不明である。南岸には溜池状施設の大半が埋まった段階の縁石と推定される切石が並べられている。造られた時期については12世紀第1四半期の可能性が指摘されている。第54次調査区は本来谷地形でくぼんでいたが、近世の整地によって改変されている。谷の奥に現在も残る按察使清水と呼ばれる湧水を水源として溜池状施設に集め、大池跡へ流したものであろう。

第62次は大池跡の西部外方、大池跡西岸と平泉遺跡調査会によって調査された伝小経蔵跡南方遺跡との間で実施されたが、切土による地形改変が行われた16世紀後半～末のいくつかの遺構が検出されたが、12世紀の様相は明らかではない。

第2期内容確認調査は平泉遺跡調査会の調査地点とも一部重なりながら、中島や東堤塘部などを調査している。中島が旧表土に盛土して造られていること、第64次で確認された堤塘の新旧2時期が第79次調査でも認められたこと、I期池跡の池底が整地されていることなどが明らかになっている。なお橋跡は現在のところ発見されていない。

大池跡の古期I期は北東から南西に細長く、北東部がやや突出する約120×70m不整な楕円形状を示し、新时期II期は北東部を埋め立てて縮小すると共に東部堤塘も造り直していて、北東から南西に長い95×60m前後の楕円形を呈していることが分かった。深さは、第64次調査の東部堤塘付近で測ると、現地表からI期が1.6m前後であるのに対し、II期が1.2m～1.4m前後と浅くなる。造成年代は、出土遺物からI期は12世紀初頭～前葉、II期は12世紀後半代となる。なお、I期・II期ともハスの花托や果実が出土し、蓮池だったものとみられる。

いわゆる『中尊寺建立供養願文』についてはさまざまな見解があるが、記述された池に相当するものが大池跡であるとする説が有力である。池は初代清衡期に完成し、3代秀衡期に改修されているにも関わらず、『中尊寺建立供養願文』に言う堂塔や大門、築垣、橋などの遺構は現段階ではまったく確認できていない。平泉遺跡調査会は大池跡の西方2か所を伝小経蔵跡と伝小経蔵跡南方遺跡として調査し、また第62次でも西岸外方を調査しているものの、それらに該当する明確な遺構は見つかっていない。同様に、平泉遺跡調査会が伝大池北方遺跡として、また第55次でも調査した北西部は、I期池跡に対する整地盛土層が検出されたものの、建物跡は見つかっていない。

『吾妻鏡』文治5年(1189)9月17日条は中尊寺の伽藍や堂塔について記述しているほかに、「関路」を開いて旅人往還の道としたと伝える。第51次調査では金色堂の正面に面した位置に道路の一部、また、第61次調査では現参道月見坂の南斜面下方、大池跡中島から東約160mの所に石敷道路が見つかっているが、直線では繋がらない。いずれも12世紀の時期のものである。それが「関路」に相当するかどうかは別にして、屈折しながら繋がる同一の道路だと仮定すれば、金色堂へ向かう場合は左手に大池を見下ろし、同時に右手から正面に金色堂を仰ぎ見ることができたであろう。

## 5 無量光院跡庭園遺構(むりょうこういんあとていえんいこう)

所在地：平泉町平泉字花立／奈文研コード番号：03005／発掘調査歴：表39～49／図：5

特記事項：国特別史跡。

遺跡はJR平泉駅から北西約500mの町の中心域に所在する。南辺は推定になるが、寺域は南北320m、東西230mのほぼ長方形を呈し、南を除いた3方は土塁が囲み、西は土塁に沿う堀の痕跡が外側に認められる。現状は、JR東北本線と県道が遺跡を横断し、南西部と中央部・北部とに分断されている。池跡は梵字が池と呼ばれる。池跡中央から西岸に寄った位置に本堂阿弥陀堂の礎石を残す西島があり、その東正面、池跡のほぼ中央には東中島が残る。

発掘調査は、1952年の文化財保護委員会の調査を第1次とし、開発に伴う事前の緊急発掘調査もあるが、2012年度で25次に及んでいる。現在、平泉町教育委員会は復元整備に伴う内容確認調査を2002年度から継続して行っている。

第1次調査では西島と東中島、そして池跡の一部が発掘された。東中島は正三角形の形状を示し、あまり規模の大きくない3棟の礎石建物跡が東西に並んで検出され、それぞれ西方建物跡、中間建物跡、東方建物跡と称され、西方建物跡については舞台あるいは舞殿に拝所を兼ねた特異な形式などの

説があげられた。園池跡の調査は、本堂の中軸線を東へ延ばして池底の石敷の有無や堆積物の状態などの確認を目的に行ったが、園池の構造に関する資料を得ることができなかつたため、測量と地上観察による庭園地割の復原を試みている。

内容確認調査では池岸の追跡が行われ、県道と JR 東北本線に挟まれた範囲の池岸が概ね確認できた。第 1 次調査で北東岸が県道よりも北に広がることが推測されていたが、第 20 次でその一部が確認された。また南部は JR 東北本線によって壊されているが、それを越えた南へは広がらないものと推測される。第 25 次（2012 年度調査。未報告）で北小島の北東に見つかった南東に大きく延びる岬状の張り出しと入江以外の池岸はほとんど出入りのない直線的あるいは緩やかな曲線を描き、全体としては不整楕円形状を呈し、北東～南西が 150m 前後、東西が 140m 前後の大きな池跡であることが判明した。護岸や池底は地山を削り出した状態のままで、玉石などは使われていない。また景石は東中島の縁辺部に認められる。園池跡の深さは 0.4m 前後である。

第 17 次調査では西島の北に 10×11.5m の不整多角形を呈する小島が検出され、両者の間に 1×3 間の橋跡が見つかった。また北小島から北岸へ向かう土手状の高まりがあり、橋に関連する遺構と考えられている。導水に関する遺構は第 19 次調査で検出された。本堂北西部の西側土塁の裾から湾曲して池跡の岸へ向かう 1 号溝は素掘りであり、最大幅 1.4m、最大深度 0.37m で長さ 31m にわたって調査された。また池跡への落ち口の岸には導水のろ過装置と推測できる 3 か所の落ち込みがある。

第 23 次調査は本堂基壇周辺をめぐる石敷および正面に敷かれた塙の広がりを確認し、舞台と推測される掘立柱建物跡を本堂の正面の西島東端に検出した。掘立柱建物跡は 3×3 間の総柱で 1 辺 5.9m の正方形を呈する。第 25 次調査は東中島の北半を再調査し、南半の再調査も予定されている。第 1 次調査で検出された 3 棟の礎石建物跡は再検証されることになり、舞台と推測される掘立柱建物跡も含めてその性格が検討されるであろう。

第 1 次調査の際、東中島から東岸へ架かる橋が想定されたが、現在のところ橋脚等は見つかっていない。また第 24 次（2011 年度調査。未報告）は本堂後方の池底を調査して尾廊がないことを再確認したが、橋脚が存在したかどうかなどは今後の課題である。なお、土塁は緊急発掘調査で北側の一部及び西側の南端で調査されている。明確な版築の手法はとらず、地山粘土を積み上げて突き固めている。東西の土塁は規模も大きく、一部は築山とされていたのかもしれない。

無量光院跡は 3 代秀衡の造営になる。西約 600m には金鶏山（98.3m）が位置し、頂上には 12 世紀前半～後半の経塚が複合して営まれている。金鶏山頂は東中島の 3 棟の建物跡や舞台跡、そして阿弥陀堂を通る東西の中軸線の延長にある。菅野成寛氏によると、金鶏山頂に日が沈むのは 4 月と 8 月であるという。園池と仏堂、舞台ほかの施設、背後の山、そしてその山頂に沈む日輪が一体となって浄土世界を演出する無量光院跡に浄土庭園の完成された一つの姿を見ることができる。

## 6 柳之御所跡庭園遺構（やなぎのごしょあとていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字柳の御所／奈文研コード番号：03006／発掘調査歴：表 50～53／図：6

特記事項：柳之御所・平泉遺跡群として国史跡。

柳之御所遺跡は JR 平泉駅北北東約 0.6km に所在する。北西から南東に細長く、堀跡により区画された内部と外部とでは遺跡の性格や機能が異なる。園池跡が見つかったのは平泉藤原氏の政庁の可能性が高い堀内部地区の中樞になる地点である。園池跡は 1989 年度から 3 カ年にわたって緊急発掘調査として行われ、史跡として保存されてからは 2003～05 年度に復元整備を目的に追加調査され

3) 菅野成寛：平泉無量光院考。『岩手史学研究』74号、岩手史学会、1991年。



た。

2006年度の調査報告書は園池跡に3期の変遷がみられるとし、旧い方から順にⅠ～Ⅲ期とした。

Ⅰ期はⅡ期の下に埋まっているため、トレンチにより池底と汀を部分的に確認しているだけで、全容は不明である。南北に細長い形状で、南北最大長42m、東西最大幅23m、深度0.6～0.8mを測る。概ね平坦な池底から岸への立ち上がりは、緩やかな勾配となるように盛土されているところが多い。ただ、西側については屈曲しながら南へ広がる可能性も指摘されている。排水路31SD58は側板が残る暗渠排水で、西へ延びて猫間が淵と呼ぶ低地へ繋がるのであろう。附属施設としては橋跡がある。東西に延びるもので、確認できた掘立柱の橋脚は4間分であるが、西端の1間分が削られて失われていると判断し1間×5間を想定している。橋から西をみると、ほぼ正面に金鷄山を望むことができる。

Ⅱ期はⅠ期園池跡を埋め立てて造る。岸にいくぶん出入りがある不整楕円形状で、南北42m、東西35m、深度0.6mを測る。中央に南北25m、東西12mと大きな中島を伴う。園池および中島の東岸には玉石が洲浜状に貼られた状態でよく残る。また中島の北岸には景石群があり、園池の北岸中央には護岸のための大きな石が認められた。園池跡の南西部は残存状態が悪かったが、盛土をして平坦にしてから池底を地山まで掘り込んだもの、逆に北側は園池の造成にあたって掘削して平坦にしていたものと推測されている。遺構の保存を優先したために調査が及ばない部分があり、橋跡は検出できなかったが、ないとは断定できないとしている。また、排水溝は園池跡南東端の溝跡31SD59と推測された。溝跡は大きく弧を描きながら南西へ下ってゆく。

緊急発掘調査では園池跡は堀跡23SA1で東と南を限られていると考えられたが、削平されて西側が不明な南辺を仮に延長した場合、池尻がそこからはみ出てしまうことになるため、両者の関係は再検討が必要である。

Ⅲ期は、Ⅱ期が廃絶した後、東半が水によって著しく浸食されて大小の溝が刻まれた状態と考えられた。いつの時期かは不明だが、南端が人為的に塞がれたために停滞し、それを埋める堆積物がラミナとして認められた。

時期は、Ⅱ期が12世紀第4四半期と考えられ、それから推測してⅠ期は12世紀中葉またはそれより古い段階、そしてⅢ期は12世紀かどうかも含めて明確でない。園池跡の北東20m付近には規模の大きな掘立柱建物跡が集中し、中心建物群と呼ばれた。現在、そのうちの28SB2と28SB4の2棟がⅠ期の園池跡に伴うものと考えられている。

## 7 西光寺遺跡庭園遺構（せいこうじいせきていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字北沢／奈文研コード番号：03007／発掘調査歴：表54・55／図：7

特記事項：達谷窟毘沙門堂境内は「達谷窟」として国史跡に指定。

### 【遺跡解題】

遺跡はJR平泉駅から南西6kmの地点、平泉町と一関市巖美を結ぶ県道平泉巖美線沿いにあり、すぐ南を北上川の支流、太田川が東流する。遺跡の中心には、窟毘沙門堂とその別当である達谷西光寺がある。窟毘沙門堂の南前面には東西約30m、南北約17mの砲弾形をした蝦蟇が池と呼ぶ池があり、中島には弁天堂が建っている。

1985年度の第2次調査は、蝦蟇が池の北岸と窟毘沙門堂の間に東西に並ぶ南北トレンチ3本を設定して行われ、埋没した園池跡の北岸が地表0.5mの深さから検出された。蝦蟇が池の北岸から約6～7m北に位置する。概ね人頭大の川原石を野面に積み上げ、間に拳大の川原石を充填している。4段から6段に重ねて石を組むが、軟質な土の上に川原石をそのまま積み、頂部には天端石は見られず、裏込の石もない。約56度～70度の急傾斜で、高さは1m前後になる。

2010年度の第7次調査第2地点は蝦蟇が池の南西約20mの低地をトレンチ調査し、園池跡の落ち込みとみられる部分と拳大を主とした石敷面を確認した。埋没した園池跡の南西岸に近い個所と推測でき、園池跡は蝦蟇が池南西隅から南西方向へ10m前後の広がりをもつことが推測される。なお、第2次調査で埋土下半の層から出土した多数のかわらけから、園池跡は12世紀後半代に機能していたものと考えられる。

『吾妻鏡』文治5年（1189）9月28日条には、平泉を滅ぼした源頼朝が鎌倉へ帰る途中、田谷窟、現在の達谷窟を通ったという記事があり、続いて坂上田村麻呂が九間四面の精舎を建て多聞天像を安置して西光寺と号したとみえる。古瓦の出土も知られ、12世紀以前に建立された寺院の可能性があり、中世にも多数の支院を有していたとされるが、平泉藤原氏がどのように関与していたのかは不明である。

## 8 志羅山遺跡庭園遺構（しらやまいせきていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字志羅山／奈文研コード番号：03008／発掘調査歴：表56／図：8

志羅山遺跡はJR平泉駅西側から国道4号を西へ越え、観自在王院跡に接する広い範囲を占め、現在の市街地と重なっている。

1992年度に行われた第16次調査は観自在王院跡南東隅に近い地点を発掘調査した。池跡は南側が調査区域外にでることから詳細に不明な点があるが、南北に長い楕円形状の東岸の一部はわずかに西へ張り出す。検出規模は南北8.5m、東西7.5m、検出面と池底との最大比高は0.45mで、素掘りである。第1中島が北岸から約5m南に地山を掘り残して造られている。径2.5～3.3mの不整形を呈す。中島頂部と池底との比高は0.3mと小さい。第1中島の南西に南側が調査区域外にでる地山のわずかな高まりがあって第2中島と呼称されたが、西岸との間が幅1.2～2.0mの溝状であることから、出島状に張り出した部分の可能性もあるとされる。北側が池上となるが、導水や排水に係る施設は検出されていない。出土遺物は12世紀のものほかに13～14世紀のものが少量含まれており、池跡の年代は12世紀よりも下がるものと見られる。

調査面積が小さく、池跡に関連する建物跡等は検出されていないが、規模や検出地点などからは個人邸宅に伴う可能性が高い。

## 9 白山社庭園遺構（はくさんしゃていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字鈴沢／奈文研コード番号：03009／発掘調査歴：表57・58／図：9

特記事項：「日吉白山社跡」は特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡の飛び地指定。

遺跡はJR平泉駅の北西300mに位置する。現在、飛び地指定を受けている日吉白山社跡には妙理菩薩堂が建ち、東西の両脇と北の背後は「コ」字形の土塁で囲まれ、北側と東側はその外に幅18m前後の堀跡が認められる。境内の南前面は低地になり、水田として利用されていた。1992年度に実施された第3次調査はその低地を対象にした内容確認のためのトレンチ調査で、石積護岸や橋脚、杭列が検出され、池跡の存在が確認された。

石積護岸は東側堀跡の東岸を南に延ばした推定線上に検出された。トレンチで確認できたのはごく一部で、ボーリングによって追跡した結果、南半がわずかに湾曲するが南北にはほぼ直線的に伸びる40mほどを確認した。北端はさらに延びて堀跡と重なると推定できるが、南端は途切れてしまう。護岸は池底近くを除いて20～30cmの川原石を隙間なく積み、垂直高は約0.5mで急勾配である。外側1mには裏込めの可能性がある急傾斜の掘り込みを伴い、底は地山ブロックを含んだ土で整地される。

トレンチの西には、現在の参道につながる細い道が南北に延びる。その東隣を調査し、道に沿う東

西1間、南北2間分の柱根を検出した。耕作の際に柱根が抜き取られたという話も伝わり、さらに南西へ延びていたであろう橋脚の一部である。

低地の広がりと同様に確認された堆積物、石積護岸、橋脚からはかつては池だったことが考えられる。以前は東西方向に延びていた沢が12世紀にはほぼ埋まりきって湿地状態を呈していたのを利用し、石を積んで岸を造り底を整地して池とし、橋を架けたのであろう。池跡の深さは1.3mほどである。なお、境内北西部の低地を対象に行われた1990年度の第1次調査で検出された1号流路が池跡への導水の役割を果たしていた可能性がある。

出土した多数のかわらけや池底直下からの完形の花枝双雀鏡などから、池跡は12世紀中葉から後半には機能していたことが分かる。遺跡は、『吾妻鏡』文治5年9月17日条に記された「一、鎮守の事。中央惣社、東方日吉・白山両社（以下省略）」に該当することが考えられ、西側の堀跡の有無が現状では確認できないが、堀と池が一体になって神社境内を囲んでいたものとみられる。

#### 10 花立Ⅱ遺跡庭園遺構（はなだて2いせきていえんいこう）

所在地：平泉町平泉字花立／奈文研コード番号：03010／発掘調査歴：表59／図：10

緊急発掘調査に伴うもので、調査地点はJR平泉駅から北西500mの白山社境内の西側である。園池跡は東西が調査区域外に出るが、南北長24m、東西の検出長17mで、隅丸方形ないしは不整形円形を呈する素掘りのものである。中央に9.6×12mでダルマ形の中島を伴い、東西方向の堀跡を伴うとされる。また、導水溝が北西部に取り付き、排水施設は南東部にあるものと推測された。

園池跡の北に隣接して東西7間×南北5間分の掘立柱建物跡が検出されたが、北と東が調査区域外に出るため全形と規模は不明である。また東西5間×南北2間の掘立柱建物跡が園池跡中央から南35mの位置に検出された（白山社遺跡第6次調査）。2棟は軸方向が同じであることから共に園池跡に伴うものと推測された。それらの遺構は、園池跡埋土や導水溝から多量に出土したかわらけなどから12世紀後半代の時期のものと考えられる。

#### 11 志羅山遺跡（しらやまいせき）第66次・82次・92次・96次・97次調査

所在地：平泉町平泉字志羅山／奈文研データベース未登録／発掘調査歴：表60～64／図：11

いずれも緊急発掘調査に伴うものである。第66次調査は1997年度に行われ、1号池跡はJR平泉駅から南西250mの国道4号に隣接する地点に検出された。その後、1号池跡周辺で第82次、92次、96次・97次の調査が行われた。

第66次調査では、12世紀に埋め立てて整地している南北幅約13.5mの東西に延びる埋没沢が検出された。1号池跡はその整地の際に造られ、池岸から池底にかけての下半分は同じ土を貼りつけている。南北長約13.5m、東西幅約7mの方形状になる東端部分が検出されたが、南岸はわずかに湾状に造られている。池岸から池底にかけては皿状で明瞭な区別がつかないが、深さは約1mである。東岸中央には幅2.5mの排水溝が付き、東3.5mにある12世紀の南北道路の西側側溝につながり、池底から40cmを越える水を排水する仕組みになっている。

その後北西約15m地点で行われた第82次調査では1号池跡の北岸の一部が東西約9mにわたって検出された。弧状の岸は中央部がわずかに出島状に南へ張り出す。第92次調査は1号池跡内及び南岸と一部が重なるトレンチ調査であったが、建築工事が及ぶ深さまでの調査で打ち切り、池跡は調査されなかった。第96次調査は第66次調査区の北西隣を調査し、1号池跡の北岸へ傾斜する面を検出した。さらに1号池跡から西南西15mの地点で行われた第97次調査では南から北へ傾斜する面が認められ、1号池跡南岸へ下がってゆく面あるいは埋没沢の整地面かと推定された。以上の調査からは、東西方向で26m以上、南北方向で17m前後の規模を持つ比較的大きな池になることが推測できる。

第66次調査ではかわらけをはじめとする多量の遺物が埋土下半から出土した。墨書をもつ笹塔婆47点や鳴籥・鏡板に鴛鴦が象嵌された轡・墨書かわらけなど、やや特殊な遺物が含まれる。なかでも「南无大吉祥天女」や「南无如意輪観音」、「南无十四日普賢菩薩」など仏名が主に書かれた笹塔婆は、十齋日信仰あるいは現世利益的な密教修法に係るものと考えられた。笹塔婆は第82次調査でも3点が出土している。なお鴛鴦文鏡轡は京都市法住寺殿出土の重要文化財「鶴文銅象嵌鏡轡」と比べられるものである。出土遺物から、1号池跡は12世紀中葉に構築され12世紀後半代に機能していたと考えられる。

1号池跡は南北道路の西側側溝と同時存在であるが、側溝との間に塀などの遮蔽施設は存在しない。また、調査区内には関係が推測できるような建物跡は検出されておらず、池跡の性格は不明である。

## 12 志羅山遺跡（しらやまいせき）第73次・77次調査

所在地：平泉町平泉字志羅山／奈文研データベース未登録／発掘調査歴：別表65・66／図：12  
1998年度の第73次と77次調査はJR平泉駅から西へ約80mの志羅山遺跡の東端に相当する地点で行われた緊急発掘調査である。

第73次72区は東西長8.4m、南北長最大2.5mの狭い調査区である。池状遺構1号は、西北西から東南東へ傾斜して下がる溝状部分とその東南東端が接する東側に広がる低地部分とからなる。溝跡は上幅0.82m以上、深度0.24mで、検出できた長さは2.5mほどである。低地部分は、西壁の一部を含む約4.2×1.9mの範囲と最大深度0.42mが確認できた以外は調査区域外となる。壁は緩やかな立ち上がりを示す。

第77次調査は第73次72区の東隣接地を調査した。南北約18m、東西約7.6mの狭い調査区いっばいに池跡の北東部から東部が検出され、西側は調査区域外に広がる。検出規模は南北14m、東西6.5mで、岸の北東部は小さな入江状になって外方へ張り出し、東部から南東部にかけては緩やかな出入りがみられる。東半の壁寄りの直径3mほどの円形の部分は、地山を掘り残した上に最大層厚0.25cmで粘土を貼りつけて造っていることから中島として報告されているが、等高線からは出島状のものと見ことも可能であろう。池跡及び中島の壁は緩やかな傾斜を示す。池跡の深さは0.2～0.5mである。

池状遺構1号と第77次調査の池跡は同一のものである。第77次調査の入江状部分の北北東端から池状遺構1号の南西端までは約22mを測るが、全体の形状及び規模は不明である。

池跡の東岸から0.5mほど東には、12世紀の主要な南北道路の一つの西側側溝が隣接する。また池跡南部で重複し、それよりも旧いとされる第77次1号溝は、第73次67区の1号あるいは2号溝と対になる東西道路の北側側溝と推測され、先述の主要道路西側側溝と並行する塀跡よりも新しいことが分かっている。いずれも12世紀後半代の遺構であり、道路や塀が短時間のうちに重なりあう場所に池は造られている。道路側溝に隣接しながら遮蔽施設を伴わない点、「南无阿弥陀如来」や「南无普賢口」、「南无妙法蓮華口」などが墨書された笹塔婆が出土した点は志羅山遺跡第66次1号池跡に共通するが、具体的な性格不明とせざるをえない。

## 13 花立Ⅱ遺跡（はなだて2いせき）第13次調査

所在地：平泉町平泉字花立／奈文研データベース未登録／発掘調査歴：表67／図：13

2000年度に実施された第13次調査は観自在王院跡から北140mの地点で行われた緊急発掘調査である。調査地は金鶏山の南東裾野に位置する。調査面積は1,500㎡で、南東に向かって下がる緩斜面は後世の切土と盛土により造成されていた。12世紀後半代の遺構は、6棟の掘立柱建物跡や石敷面、中島を伴う池跡、溝跡、土坑が検出された。3期の変遷が考えられ、古い方から順にⅠ期～Ⅲ期と区



分された。

池跡は調査区の南東隅に検出され、南北11m、東西15mの北部が調査できた以外は調査区域外となる。北岸は直線的で、西岸は弧を描いて小さく膨らむが、変化に乏しい。素掘りで、洲浜や景石、石組等は検出されていない。中島を伴うが、池跡同様に調査区域外へ出てしまい、南北5m、東西9mほどの北部が確認できただけである。北岸は直線的で、北西岸が出島状に張り出している。池跡の北西岸に接して玉石敷面が狭い範囲に広がり、池跡と一体のものとして推測されている。

池跡はⅡ期のものであり、同時期の掘立柱建物跡2棟のうちBは北西側に隣接し、Fは池岸から15mほどの北東部に検出された。Bは1間2.3mの5×2間の東西棟で、北と南に庇が付く。3個の柱穴の底には瓦片が敷き詰められている。Fは3×3間以上の規模が推測できるが、調査区外に出るため詳細は不明である。池跡は次のⅢ期には埋め立てられ、大型の掘立柱建物跡Eが重複して建てられる。

掘立柱建物跡BとFとは軸線がわずかに異なるが、Bからは南東から南にかけてまたFからは南西に池跡を見る状況にある。故人邸宅とそれに伴う園池とも考えられるが、詳細不明である。

## おわりに

平泉の発掘庭園は、寺院や神社、政庁と目される遺跡に伴うもののほか、個人邸宅に付属すると推測されるものがある。造営の時期は、12世紀よりは下がる志羅山遺跡庭園遺構を除くと12世紀前葉から平泉藤原氏が滅亡する1189年までの間に限られ、特に中葉から後半代のものが主になる。

紹介した13か所以外に、現在も池として姿を見せていて12世紀にも存在した可能性が指摘されている2か所がある。一つは、毛越寺法華堂の北にある弁天池である。観自在王院庭園遺構で検出された導水溝の水源と考えられている。二つめは花立溜池である。姿を変えていることは十分に考えられるが、西方高台にある12世紀の花立廃寺跡に伴う園池の可能性が言われている。いずれも発掘調査の手はまだ及んでいない。

寺院付属の発掘庭園は内容確認調査が無量光院跡や大池跡で現在も継続され、調査のたびに重要な新しい知見が得られている。一方、志羅山遺跡や花立Ⅱ遺跡などで検出された発掘庭園は位置や遺跡の性格、形態、構造、規模などからみて個人邸宅に伴うものの可能性が高いが、部分的な発掘調査であり、具体的な内容の把握が困難である。発掘庭園は12世紀の「都市平泉」の解明の鍵を握る重要な遺構の一つであり、さらなる資料の蓄積が俟たれる。

## 参考引用文献

及川 司：平泉の庭園。『遺跡学研究』第9号、遺跡学研究会、2012年。

本澤慎輔：平泉の庭園遺構。『都市・平泉—成立とその構成—』、日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集、日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会、2001年。

表 発掘庭園調査経歴及び発掘調査報告一覧

1 毛越寺庭園(宗文研コード番号:03001)

| 番号 | 調査年度          | 調査回数                            | 調査主体           | 報告書等                                 | シリーズ名 | 編・著者     | 発行者      | 発行年   | 備考                       |
|----|---------------|---------------------------------|----------------|--------------------------------------|-------|----------|----------|-------|--------------------------|
| 1  | 1958年度        | 調査回数                            | 平泉遺跡調査会        | 報告書等                                 |       | 平泉遺跡調査会  | 平泉遺跡調査会  | 1958年 |                          |
| 2  | 1955～1958年度   | 第1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13回 | 平泉毛越寺と観自在王院の研究 | 『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』                    |       | 鎌島文治郎編   | 東京大学出版会  | 1961年 | 1955～1958年度の発掘調査の一括報告書   |
| 3  | 1980年度        | 第12次                            | 平泉町教育委員会       | 昭和65年度 特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書(第1次調査・第2次調査) |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1981年 | 保存修繕事業に伴う発掘調査            |
| 4  | 1981年度        | 第3次                             | 平泉町教育委員会       | 昭和65年度 特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書              |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1982年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 5  | 1982年度        | 第4次                             | 平泉町教育委員会       | 昭和65年度 特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書(第4次調査)       |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1983年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 6  | 1983年度        | 第5次                             | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第5次調査)        |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1984年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 7  | 1984年度        | 第6次                             | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第6次調査)        |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1985年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 8  | 1985年度        | 第7次                             | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第7次調査)        |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1986年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 9  | 1986年度        | 第8次                             | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第8次調査)        |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1987年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 10 | 1987年度        | 第9次                             | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第9次調査)        |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1988年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 11 | 1988年度        | 第10次                            | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第10次調査)       |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1989年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 12 | 1990年度        | 第11次                            | 平泉町教育委員会       | 特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第11次調査)       |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1991年 | 復元整備事業に伴う発掘調査            |
| 13 | (1980～1990年度) | 一                               | 平泉町教育委員会       | 『特別史跡・特別名勝毛越寺境内・特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書』    |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 2007年 | 1980～1990年度調査の総括を含む整理報告書 |

2 観自在王院庭園(宗文研コード番号:03002)

| 番号 | 調査年度        | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等                                 | シリーズ名 | 編・著者     | 発行者      | 発行年   | 備考                               |
|----|-------------|------|----------|--------------------------------------|-------|----------|----------|-------|----------------------------------|
| 14 | 1954～1956年度 | 調査回数 | 平泉遺跡調査会  | 報告書等                                 |       | 鎌島文治郎編   | 東京大学出版会  | 1961年 | 1954～1956年度の3回年次及び発掘調査の一括報告書     |
| 15 | 1972年度      | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 昭和47年度 平泉観自在王院跡整備発掘調査報告(第1次調査・第2次調査) |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1973年 | 復元整備事業に伴う発掘調査                    |
| 16 | 1972年度      | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 昭和47年度 平泉観自在王院跡整備第2次発掘調査報告           |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1973年 | 復元整備事業に伴う発掘調査                    |
| 17 | 1973年度      | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 昭和48年度(第2次) 観自在王院跡発掘調査報告             |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1973年 | 復元整備事業に伴う発掘調査                    |
| 18 | 1975年度      | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 昭和65年度 観自在王院跡発掘調査報告書                 |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1976年 | 復元整備事業に伴う発掘調査                    |
| 19 | 1976年度      | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 昭和65年度 観自在王院跡発掘調査報告書                 |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1976年 | 復元整備事業に伴う発掘調査                    |
| 20 | 1977年度      | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 昭和65年度 観自在王院跡発掘調査報告書                 |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1977年 | 復元整備事業に伴う発掘調査                    |
| 21 | 1972～1973年度 | 調査回数 | 平泉町教育委員会 | 『観自在王院跡整備報告書』                        |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会 | 1979年 | 復元整備を目的とした5か年5次に及ぶ発掘調査報告及び整備事業報告 |

3 中尊寺境内三重池庭園遺構(宗文研コード番号:03003)

| 番号 | 調査年度        | 調査回数      | 調査主体     | 報告書等  | シリーズ名 | 編・著者    | 発行者         | 発行年   | 備考                            |
|----|-------------|-----------|----------|---|-------|---------|-------------|-------|-------------------------------|
| 22 | 1957年度      | 調査回数      | 岩手大学     | 報告書等  |       | 坂橋 源    | 岩手大学文学部学会   | 1958年 | 発掘調査の一括報告書                    |
| 23 | 1959～1968年度 | (第1～第16回) | 平泉遺跡調査会  | 『中尊寺一発掘調査の記録』                                     |       | 平泉遺跡調査会 | 平泉遺跡調査会・中尊寺 | 1983年 | 1959～1968年度の10か年次及び発掘調査の一括報告書 |
| 24 | 1976年度      | 第17次      | 岩手県教育委員会 | 『中尊寺境内加堂跡地区の発掘調査』(『世界遺産・中尊寺 遺跡発掘の軌跡 1963～2011』所収) |       | 國生 尚    | 中尊寺         | 2012年 |                               |

4 中尊寺境内大池遺構(宗文研コード番号:03004)

| 番号 | 調査年度        | 調査回数                                       | 調査主体     | 報告書等                       | シリーズ名 | 編・著者     | 発行者         | 発行年   | 備考                            |
|----|-------------|--|----------|----------------------------|-------|----------|-------------|-------|-------------------------------|
| 25 | 1953年度      | 調査回数                                       | 平泉遺跡調査会  | 報告書等                       |       | 平泉遺跡調査会  | 平泉遺跡調査会     | 1963  | 勝安田印刷                         |
| 26 | 1969～1968年度 | (第1～第16回)                                  | 平泉遺跡調査会  | 『中尊寺一発掘調査の記録』              |       | 平泉遺跡調査会  | 平泉遺跡調査会・中尊寺 | 1983年 | 1969～1968年度の10か年次及び発掘調査の一括報告書 |
| 27 | 1997年度      | 第54次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅰ)遺構編』 |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 1998年 | 升野大地区の内容論調査。大池へ調査の一括報告書       |
| 28 | 1998年度      | 第55次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅱ)遺構編』 |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 1999年 | 内容論調査                         |
| 29 | 1999年度      | 第56次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅲ)』    |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 2000年 | 内容論調査                         |
| 30 | 2000年度      | 第57次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅳ)』    |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 2001年 | 内容論調査                         |
| 31 | 2001年度      | 第58次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅴ)』    |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 2002年 | 内容論調査                         |
| 32 | 2002年度      | 第59次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅵ)』    |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 2003年 | 内容論調査                         |
| 33 | 2003年度      | 第60次                                       | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書(Ⅶ)』    |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 2004年 | 内容論調査                         |
| 34 | 1997～2003年度 | 第54・55・56・57・58・59・60・61・62・63・64・65・66・67 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡・中尊寺境内内容論調査報告書』       |       | 平泉町教育委員会 | 平泉町教育委員会    | 2006年 | 1997～2003年度発掘の大池に係る内容論調査報告書   |

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等           | シリーズ名               | 編・著者     | 発行年   | 備考     |
|----|--------|------|----------|----------------|---------------------|----------|-------|--------|
| 35 | 2007年度 | 第73次 | 平泉町教育委員会 | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第110集 | 平泉町教育委員会 | 2009年 | 内容確認調査 |
| 36 | 2008年度 | 第74次 | 平泉町教育委員会 | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第111集 | 平泉町教育委員会 | 2010年 | 内容確認調査 |
| 37 | 2009年度 | 第75次 | 平泉町教育委員会 | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第112集 | 平泉町教育委員会 | 2011年 | 内容確認調査 |
| 38 | 2010年度 | 第76次 | 平泉町教育委員会 | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第113集 | 平泉町教育委員会 | 2012年 | 内容確認調査 |

**5 無量光院跡遺構(奈文研コード番号:03006)**

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等                 | シリーズ名               | 編・著者     | 発行年   | 備考                               |
|----|--------|------|----------|----------------------|---------------------|----------|-------|----------------------------------|
| 39 | 1992年度 | 第1次  | 文化財保護委員会 | 『無量光院跡(岩手県葛井郡平泉町)』   | 文化財保護委員会            | 吉川弘文館    | 1995年 | 報告書表紙は、第1次発掘調査から、調査履歴では第5次としている。 |
| 40 | 1992年度 | 第2次  | 平泉町教育委員会 | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』       | 岩手県平泉町文化財調査報告書第84集  | 平泉町教育委員会 | 1993年 |                                  |
| 41 | 2002年度 | 第13次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第83集  | 平泉町教育委員会 | 2003年 |                                  |
| 42 | 2003年度 | 第14次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第87集  | 平泉町教育委員会 | 2004年 |                                  |
| 43 | 2004年度 | 第15次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第87集  | 平泉町教育委員会 | 2005年 |                                  |
| 44 | 2005年度 | 第16次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第89集  | 平泉町教育委員会 | 2006年 |                                  |
| 45 | 2006年度 | 第17次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第107集 | 平泉町教育委員会 | 2008年 |                                  |
| 46 | 2007年度 | 第18次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第109集 | 平泉町教育委員会 | 2009年 |                                  |
| 47 | 2008年度 | 第19次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第115集 | 平泉町教育委員会 | 2010年 |                                  |
| 48 | 2009年度 | 第20次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第115集 | 平泉町教育委員会 | 2011年 |                                  |
| 49 | 2010年度 | 第21次 | 平泉町教育委員会 | 『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第117集 | 平泉町教育委員会 | 2012年 |                                  |

**6 柳之御所跡遺構(奈文研コード番号:03006)**

| 番号 | 調査年度        | 調査回数       | 調査主体                   | 報告書等                 | シリーズ名               | 編・著者                   | 発行年   | 備考                        |
|----|-------------|------------|------------------------|----------------------|---------------------|------------------------|-------|---------------------------|
| 50 | 1989～1991年度 | 第23・28・31次 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 『柳之御所跡――埋蔵文化財センター』   | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 1995年 |                           |
| 51 | 2003年度      | 第57次       | 岩手県教育委員会               | 『柳之御所跡――第57次発掘調査報告書』 | 岩手県教育委員会            | 岩手県教育委員会               | 2004年 |                           |
| 52 | 2004年度      | 第59次       | 岩手県教育委員会               | 『柳之御所跡――第64次発掘調査報告書』 | 岩手県教育委員会            | 岩手県教育委員会               | 2007年 | 園地については第59次と第64次調査とを併せて報告 |
| 53 | 2005年度      | 第64次       | 岩手県教育委員会               | 『柳之御所跡――第64次発掘調査報告書』 | 岩手県教育委員会            | 岩手県教育委員会               | 2007年 |                           |

**7 西光寺遺跡遺構(奈文研コード番号:03007)**

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等                                   | シリーズ名               | 編・著者     | 発行年   | 備考 |
|----|--------|------|----------|--|---------------------|----------|-------|----|
| 54 | 1985年度 | 第2次  | 平泉町教育委員会 | 『西光寺遺跡第2・3・4次、白山社遺跡第3次、西光寺跡第2次発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第89集  | 平泉町教育委員会 | 2001年 |    |
| 55 | 2010年度 | 第7次  | 平泉町教育委員会 | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』                         | 岩手県平泉町文化財調査報告書第116集 | 平泉町教育委員会 | 2012年 |    |

**8 志羅山遺跡遺構(奈文研コード番号:03008)**

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等                              | シリーズ名              | 編・著者     | 発行年   | 備考          |
|----|--------|------|----------|-----------------------------------|--------------------|----------|-------|-------------|
| 56 | 1992年度 | 第16次 | 平泉町教育委員会 | 『志羅山遺跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第35集 | 平泉町教育委員会 | 1993年 | 13世紀の可能性がある |

**9 白山社遺跡遺構(奈文研コード番号:03009)**

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等                                   | シリーズ名              | 編・著者     | 発行年   | 備考   |
|----|--------|------|----------|--|--------------------|----------|-------|--|
| 57 | 1990年度 | 第1次  | 平泉町教育委員会 | 『白山社遺跡第3次、白山社遺跡第1次発掘調査報告書』             | 岩手県平泉町文化財調査報告書第27集 | 平泉町教育委員会 | 1991年 | 白山社の西側低地に相当する部分の調査で、第3次調査発掘中の池跡と関連する可能性のある遺跡を検出。 |
| 58 | 1992年度 | 第3次  | 平泉町教育委員会 | 『花立1遺跡第2・3・4次、白山社遺跡第3次、西光寺跡第2次発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第89集 | 平泉町教育委員会 | 2004年 | 園地、補脚を確認。和盛土上。                                   |

**10 花立II遺跡遺構(奈文研コード番号:03010)**

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体     | 報告書等  | シリーズ名               | 編・著者                   | 発行年   | 備考         |
|----|--------|------|----------|---|---------------------|------------------------|-------|------------|
| 59 | 1996年度 | 第6次  | 平泉町教育委員会 | 『平泉の庭園遺構』(『都市・平泉―成立とその構成―』、日本考古学協会2001年度大会研究発表要旨集所収。) | 岩手県平泉町文化財調査報告書第110集 | 日本考古学協会2001年度庭園大会実行委員会 | 2001年 | 発掘調査報告書未刊行 |

**11 志羅山遺跡第66次・82次・96次・97次調査(奈文研コード番号未登録)**

| 番号 | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体                   | 報告書等                     | シリーズ名               | 編・著者                   | 発行年   | 備考                          |
|----|--------|------|------------------------|--------------------------|---------------------|------------------------|-------|-----------------------------|
| 60 | 1997年度 | 第66次 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 『志羅山遺跡第66・66・74次発掘調査報告書』 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第312集 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 2000年 | 1号池                         |
| 61 | 1999年度 | 第82次 | 平泉町教育委員会               | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』           | 岩手県平泉町文化財調査報告書第75集  | 平泉町教育委員会               | 2000年 | 第66次調査1号池に続く北岸を検出           |
| 62 | 2003年度 | 第92次 | 平泉町教育委員会               | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』           | 岩手県平泉町文化財調査報告書第85集  | 平泉町教育委員会               | 2004年 | 第66次調査1号池内及び南岸部分に相当するが、未精査。 |
| 63 | 2007年度 | 第96次 | 平泉町教育委員会               | 『平泉遺跡群発掘調査報告書』           | 岩手県平泉町文化財調査報告書第110集 | 平泉町教育委員会               | 2009年 | 第66次1号池南側と北岸へ向かう傾斜を検出       |

|   |        |      |                            |                                   |      |                           |                            |                            |       |                          |
|---|--------|------|----------------------------|-----------------------------------|------|---------------------------|----------------------------|----------------------------|-------|--------------------------|
| 番号                                      | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体                       | 調査対象                              | 報告書等 | シリーズ名                     | 編・著者                       | 発行者                        | 発行年   | 備考                       |
| 64                                      | 2007年度 | 第97次 | 平泉町教育委員会                   | 「平泉遺跡群発掘調査報告書」                    | 報告書等 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第110集       | 平泉町教育委員会                   | 平泉町教育委員会                   | 2009年 | 第66次1号池南岸へ向かう傾斜面?を<br>検出 |
| <b>12. 志羅山遺跡第73・77次調査(発文研データベース未登録)</b> |        |      |                            |                                   |      |                           |                            |                            |       |                          |
| 番号                                      | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体                       | 調査対象                              | 報告書等 | シリーズ名                     | 編・著者                       | 発行者                        | 発行年   | 備考                       |
| 65                                      | 1998年度 | 第73次 | (財)岩手県文化振興事業<br>団埋蔵文化財センター | 「志羅山遺跡発掘調査報告書(第7・56・67・73・80次調査)」 | 報告書等 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集 | (財)岩手県文化振興事業<br>団埋蔵文化財センター | (財)岩手県文化振興事業<br>団埋蔵文化財センター | 2001年 | 第77次調査検出の池の南西部           |
| 66                                      | 1998年度 | 第77次 | 平泉町教育委員会                   | 「志羅山遺跡第75・77・78次発掘調査報告書」          | 報告書等 | 岩手県平泉町文化財調査報告書第76集        | 平泉町教育委員会                   | 平泉町教育委員会・岩手<br>県一関地方振興局七本部 | 1999年 | 第78次調査検出の池発掘と同一のもの       |
| <b>13. 花立I遺跡第13次調査(発文研データベース未登録)</b>    |        |      |                            |                                   |      |                           |                            |                            |       |                          |
| 番号                                      | 調査年度   | 調査回数 | 調査主体                       | 調査対象                              | 報告書等 | シリーズ名                     | 編・著者                       | 発行者                        | 発行年   | 備考                       |
| 67                                      | 2000年度 | 第13次 | 平泉町教育委員会                   | 「遺跡が語る平泉文化」                       | 報告書等 | 柳之御所資料館第1回特別展図録           | 平泉町文化財センター                 | 平泉町・平泉観光推進実<br>行委員会        | 2000年 | 発掘調査報告書未刊行               |





図1 発掘庭園位置図 (数字は本文・表と共通)

(1 : 25,000 古戸・平泉)

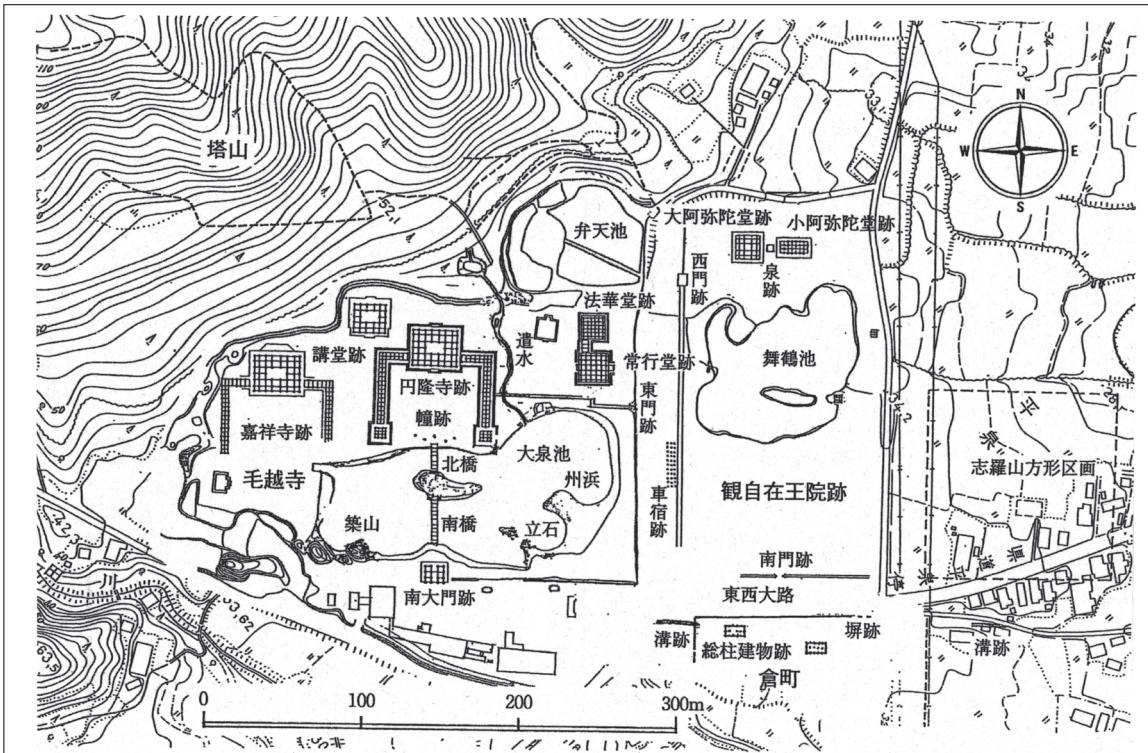


図2 毛越寺庭園と観自在王院庭園

(及川 2012 による)



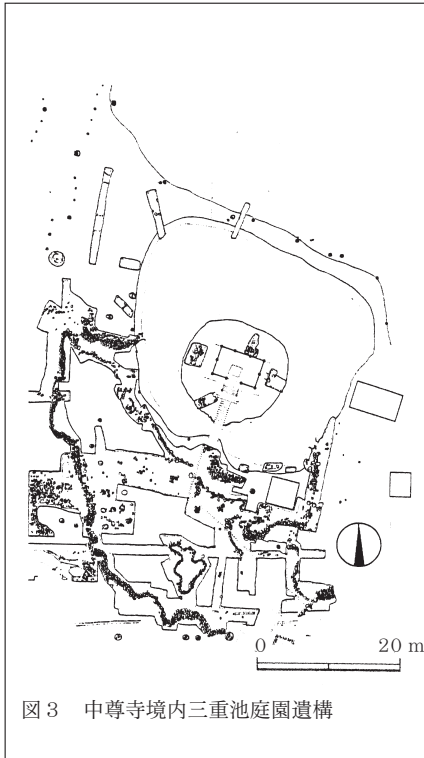


図3 中尊寺境内三重池庭園遺構



図4 中尊寺境内大池庭園遺構

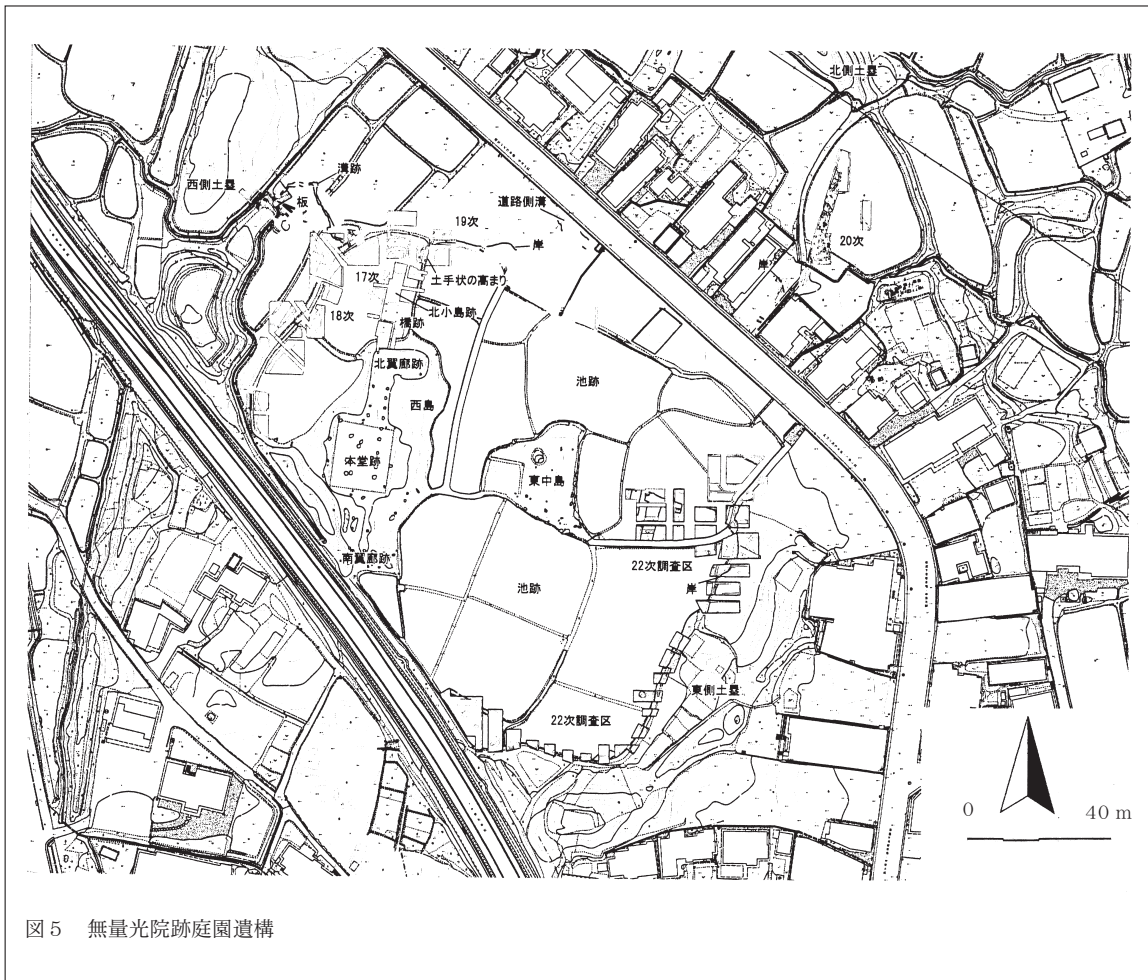


図5 無量光院跡庭園遺構

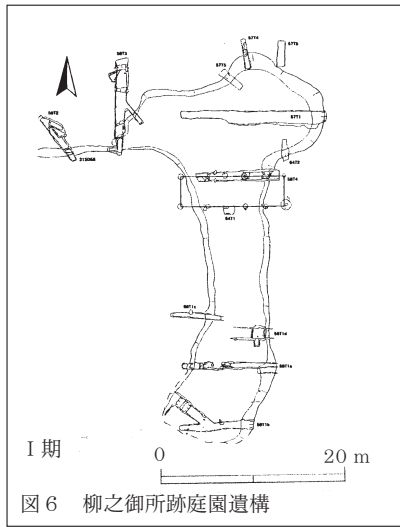
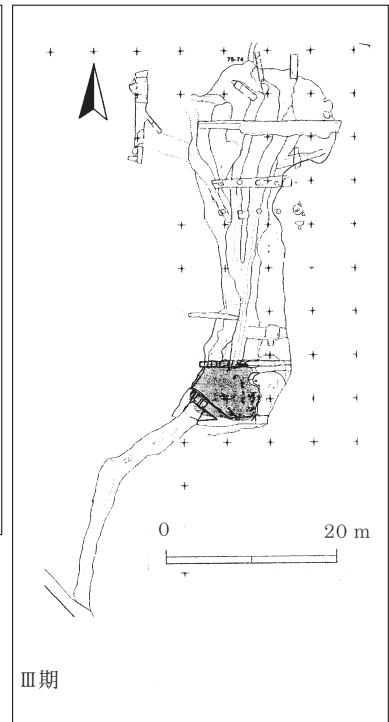


図6 柳之御所跡庭園遺構



II期



III期

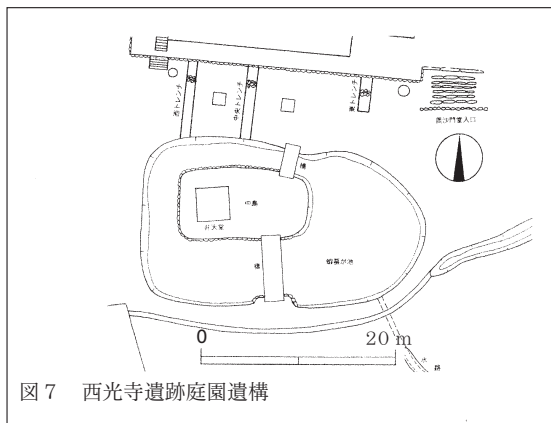


図7 西光寺遺跡庭園遺構

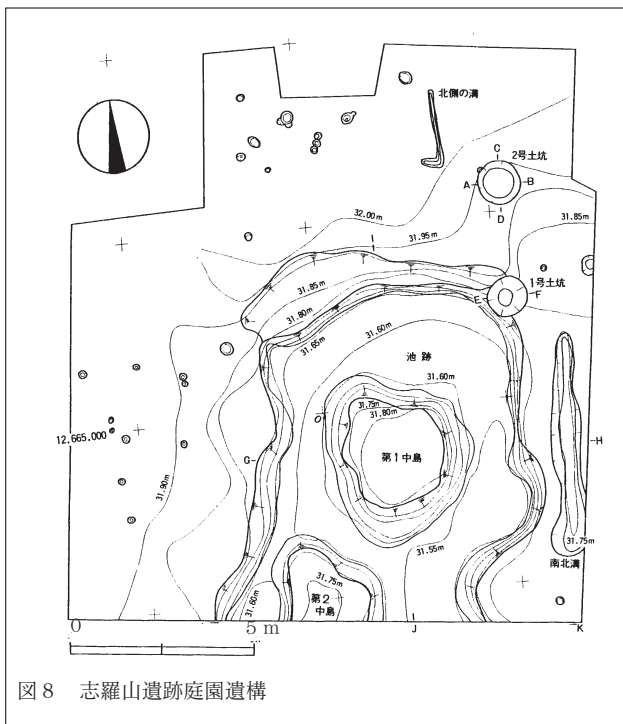


図8 志羅山遺跡庭園遺構

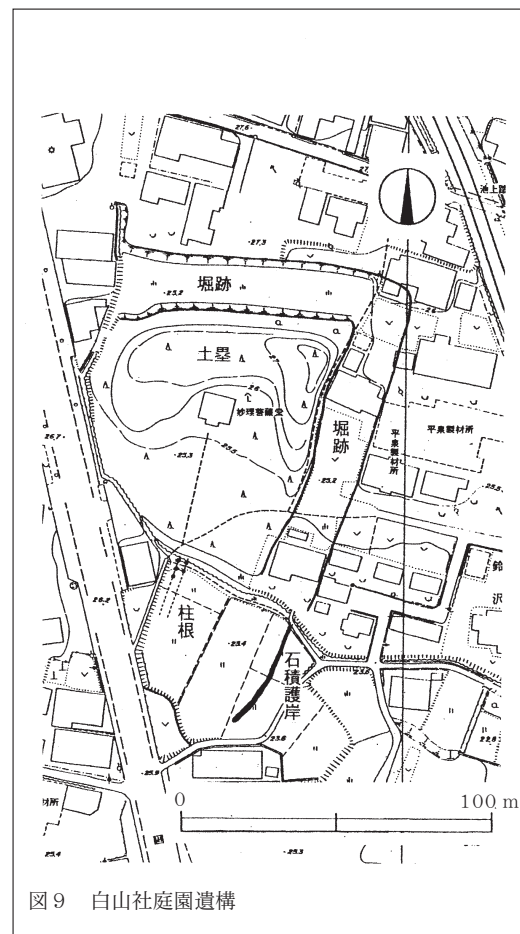


図9 白山社庭園遺構

